

海辺に生きるハチたちの暮らし

かわしまいつろう
川島逸郎（学芸員）

蜂にとっての海辺

「海」と「蜂」とは、ちょっと結び付かないかもしれませんが、関わりこそ薄く見えますが、今を生きる種にとって、これほど重要な場とはそうそうないのでは、と思えるほどです。古来より「地蜂（スガリ、スガレ等々）」といった意味の言葉があるように、土や砂の賑わった地面は、多くのカリバチ、ハナバチ類にとっては、またとない営巣（＝子育て）の場です。しかし、蜂たちに成り替わったつもりで眺めると、現代はそうした露地がいかに少ないか、ということを痛感させられます。海辺にすむ蜂はいずれも、真の海浜性昆虫ではありません。しかし、砂地を好んで営巣する種にとって、内陸からその多くが失われつつある中、海岸の砂浜とは、今や最後の拠り所になっているかのようです。

私は、残された土地にしがみつこうに生きる蜂たちに惹かれ、その存在を記録し、また彼らの生き様を映像に切り取るべく努めてきました。ここでは、その姿の一端をご紹介します。

オオモンツチバチ

Scolia historionica japonica

ツチバチ科は、コガネムシ類やクワガタムシ類の幼虫を狩る仲間です。初夏の頃、雌よりも一足先に現れた多くの雄たちが後背植生の上を飛び交いますが、配偶行動には一度も出会っていません。



図1 獲物の存在を感受したか、砂を掻き分け、♀が地中へ潜り始めました。



図2 太く頑丈な脚や大顎を使い、獲物に向かってひたすらに、砂中を掘削してゆきます。



図3 産卵を終え、砂上に再び姿を現した♀。重労働であった証しか、しばらく静かに休息していました。

アカゴシクモバチ *Anoplius reflexus*

クモを専門に狩る仲間、以前は「ベッコウバチ」と呼ばれていました。狩りの後に巣穴を掘り、幼虫には必ず1匹の獲物だけを与えます。アカゴシクモバチは、地表を走るコモリグモ類を標的にする種です。



図4 巣穴掘りの様子。左右の前脚を交互に前後させ、素晴らしい速さで砂を掻き飛ばしてゆきます。



図5 獲物の体下面に刺針を打ち込む♀。麻酔は常に的確で、クモは一瞬で不動状態に陥ります。

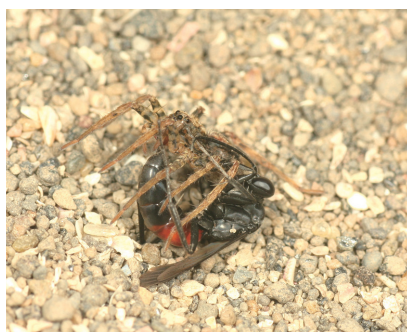


図6 この♀は、獲物の第一脚基部に刺針を打ち込みました。麻酔は一時的で、クモは半日足らずで不動状態から解けますが、狭い巣穴の中に詰め込まれるため、身動きのとれないままにハチの幼虫に食されます。



図7 麻酔を施した獲物を運搬する際は、必ずクモの脚の付け根をくわえて運びます。体のどこかを闇雲にくわえることはしません。



図8 十分に生育した幼虫は、柿渋の和紙のような繭を紡ぎます。砂粒を巢材に用いることはありません。

ニッポンハナダカバチ

Bembix niponica niponica

砂浜にすむカリバチの中でも代表的ともいえる種で、アブやハエを専門に狩ります。狩りに先立って産卵し、幼虫の孵化後も獲物を運び入れるという特異な習性を持ちます。



図9 およそ1年の時を経ての翌夏、地下で眠り続けた砂繭から新成虫が羽化してきました。



図10 巣穴を掘る♀。クモバチ類とは異なり、長い刺毛列（ベクテン）をそなえ、レーキの役を果たす前足を左右同時に前後させ、砂を後方へ放り投げてゆきます。



図11 キンバエ類を運搬する♀。その大きさに関わらず、獲物を仰向けにし、必ず中脚で左右から挟むように抱きかかえます。その方式に例外はありません。

ヤマトスナハキバチ

Bembecinus hungaricus japonicus

ニッポンハナダカバチに近縁の種ですが、はるかに小さく、体長は1cm足



図12 きれいな砂地を営巣地と定めた♀は、その上をしきりに飛び回って、巣穴掘りを始める地点を慎重に探索します。

らずしかありません。ヨコバイなどの同翅類（半翅目）を狩りますが、狩りに先だって産卵する習性は、ニッポンハナダカバチと似ています。



図13 体こそ小ぶりですが、巣穴の掘り方は、近縁であるニッポンハナダカバチと同じです。やはり両方の前脚を揃え、砂を後方へと飛ばします。

キヌゲハキリバチ *Megachile kobensis*

ハナバチの仲間であるハキリバチ類の多くは、その和名の通り、葉を切り取って巣材に用います。採取した花粉は、



図14 白い花粉はハマゴウ *Vitex rotundifolia* のもの。本種がもっとも好み、強く依存する花です。花から花へと飛び移るさ中で一瞬、雄蕊と雌蕊とを抱えるように止まることがありますが、その時雌蕊の先は花粉が貯えられたスコوباにちょうど触れる位置に来ます。

脚ではなく腹部下面にある毛の束（スコوبا）に貯めて運びます。管や既存の穴に営巣するほか、本種のように自ら巣穴を掘るものまでみられます。



図15 他のハキリバチとは異なり、砂地を掘って巣穴を造ります。幼虫のための育房の壁には、やはりハマゴウの葉片を用いますが、それらをしっかりと組み合わせ接合させて、壺の形に仕上げてゆきます。

キスジツチスガリ

Cerceris arenaria yanoi

ハナダカバチとともに、「ファーブル昆虫記」に登場することで有名な仲間です。甲虫やハナバチ類を狩るものが多く、本種は海浜性のヒョウタンゾウムシ類を専門に狩ります。



図16 ハマヒルガオ *Calystegia soldanella* の根際から、獲物であるトビイロヒョウタンゾウムシ *Scepticus uniforme* を探し出し捕捉した場面。直後に麻酔に入りました。



図17 獲物を運搬する♀。必ず、一方の前脚だけをくわえて保持します。ここでも例外はありません。



図18 営巣地を飛び交う♂は、帰巣する♀を見つけるとその背に飛び乗ります。体を高く持ち上げて丸め、左右の翅を開く♀の拒否姿勢は本種独特のものです。

私たちのすむ神奈川海辺に生きるハチたちは、年を追うごとに悪化する海浜環境、とりわけ人による過度の利用や改変に追われてその数をますます減らし、例えばニッポンハナダカバチのように、その生存はもはや風前の灯となってしまう種もいます。私は、これからの海浜環境とその利用のあり方について考えるべく、ほかの多くの海浜昆虫とともに、海辺のハチたちへの見守りと観察とを続けたいと思っています。